

神楽陽子

表紙イラスト：秋月からす

セイクリッド SACRED ORDER オーダー

～淫肉の杯は今宵も乾く～



試し読み版

二次元ぷち文庫

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『セイクリッドオーダー ～淫肉の杯は今宵も乾く～』
に基づいて作成しております。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。



セイクリッド
SACRED ORDER
オーダー

～淫肉の杯は今宵も乾く～

神楽陽子

表紙 / 秋月からす

登場人物紹介

Characters

メリア＝ウインドアイ

王女ロゼの護衛を務める騎士。かつては冒険者だったが、武術会で好成績を取めた際に騎士団から誘いを受け、ルディス王権国家の一員となった。授けられた「ルーンジュエリ」の露出度とロゼの我が侷が悩みの種。

ロゼティーラ＝オルディス

ルディス王権国家の唯一の王位継承権を持つ王女。肉が大好物で、いつも我が侷を言ったり、好き勝手をしてメリアを困らせている。自らの貧乳が密かにコンプレックスだったり。

国境には関所があり、検問を受けるイメージがあった。しかし建設の途中で放置されたらしく、毀れた路が漠然と続くだけ。いつ次の国の領土、そして野盗の縄張りに足を踏み入れてしまったのか。

ガッキーン！

金属同士のぶつかる音にカラスが驚き、黒い羽根を残していく。陽が西に大きく傾き始めた頃、一台の馬車は、ごろつきの襲撃に遭っていた。

「馬は金になるからな、手え出すなよ？　へっへっへ、どこのお嬢様か知らねえが、こいつあ久しぶりの大当たりだぜ！」

逃げ惑う御者の背中を斬り捨て、一味のひとりがおくそ笑む。窮屈な馬車の中では、小柄な少女を守る体勢で、剣士が左の腰に鞘を携えた。

「今夜は楽しめそうだなあ、おい——ぐはっ!!」

「生憎、あなたがたを楽しませるつもりなどありません」

しめしめと籠を覗き込んだ男の顔面に、重量と速度のある拳がめり込む。ついでに剣士は馬車を飛び出し、旅のマントを脱ぎ捨てた。

「な、なんだと……女？」

高級な白磁のごとく照り返る、きめ細やかな美肌の露出。たった三枚の金属板を最小限に配置した鎧が、裸同然の肉体に視線を惹きつける。女性ならではの華奢な作りの肩から

斜めに、胸の谷間に向かって、鎖骨のラインが目に見えかぶ。

量感たっぷり実に実って男をそそる巨乳は、見せられない先端部分に、翡翠色のプレートをもとなく当てていた。底の浅い碗を被せたような構図で、ラバー製のストラップを背中の側で固く結んである。

やや筋肉質の細腕がしなやかに、ウエストを撫で、愛剣を取り出す。

「女とて、騎士です」

指を根元まで通すグローブの保持力に、握力を上乗せして、右の手はすらりと剣を抜いた。左の手は鞘を投げ捨て、柄尻へと添えられる。

「立ち去りなさい。……と口で言っても、無駄のようですね」

臍の縦筋で中央を割られた胴は、脂を削ぎ落としたかのごとく括れ、女性剣士の一挙手一投足を波打させた。

長い脚に揺らされるヒップが、谷間にラバーの生地を集め、左右対称の曲線を中央寄りに引き締める。ラインは下にいくほど真円に近い。珠の美肌は、むっちりとした太腿でも張りを維持し、デルタ地帯の隙間を狭く思わせた。

脚を広げて仁王立ちになれば、女の股間を保護するには常識離れた、プレートのミニサイズが一目でわかる。逆三角形の金属板を、かろうじて恥丘に重ね、両端はアクセサリーと同類の鎖で腰にかけられてあるだけ。むしろ、ラバーの股布を尻谷に食い込ませること

で、ずれを抑えているのかもしれない。

土や砂が入り込まないよう、脛当てと一体化した具足が、じやりつと地を踏む。

「この私、メリアアウインドアイがお相手しましょう」

百七十センチの背丈の半分ほどあるロングソードが、夕暮れの日差しを掬い取り、磨き抜かれた刃を光らせた。左手も柄を握り締め、刀身をぶらつかせない。

決意に満ちて輝く瞳が、弓でも引き絞るように、青柳の眉を怒らせる。凜々しい顔つきには、物怖じを知らない勇敢さがありありと表れていた。

剣を構えているのが不思議なくらい女として整った相貌が、乾かない程度に潤った唇を一の字に結ぶ。セルリアンブルーの髪は一本のおさげにまとめられ、女剣士メリアが腰の重心をさげると、風に梳かれてから毛先を降ろす。

構えの姿勢で微動だにしないこと、十数秒。

「おいおい……ははっ、女がひとりで何ができるってんだ？ やっちまうぞ！」

美女の乱入に驚いていた野盗どもが、それぞれの武器を手に、襲いかかってくる。顔を殴られた男は我先に、頭に血を昇らせて、手斧を力任せに振りまわした。

「馬車中の女と馬を置いていきやがれ！」

「気の早い台詞ですね、てヤッ！」

それを時間差のバックステップで難なくかわし、空振りの直後を的確に詰め、メリアは

劍を鋭く水平に薙ぐ。残像を伴う一閃。

ズバン！

迂闊な男は出血とともに崩れ、動かなくなった。

「なんだと!? こ、この女!」

「私を止められるものなら、どうぞ!」

着地と同時に利き脚から駆け出して、次の標的との距離を一気に詰める。慌てる相手の錯乱する劍を、こちらは鏢元で逸らし、重心を前に体当たり。

「構えがなっていないですね、隙だらけです!」

肘鉄に切り替えて顎をかちあげ、ふらつく敵を、上から下へと両断する。全身のバネを使った斬撃は反動を得て、手足に絶妙な瞬発力を持たせた。

メリアの地を蹴る音が多くなり、ポニーテールは刃と刃の隙間を軽やかに泳ぐ。

「この野郎、ふざけやがって!」

「ふざけて成せるものではありませんよ、劍の道とは。そこです!」

連中は無作戦に突っ込んでくるだけの能なしばかりだ。どいつもこいつも、とりあえず刃を向けさえすればよいのだらう、という短絡な突撃を繰り返す。

直線で動く彼らに、円の軌道も織り交ぜるメリアを捉えるのは難しい。野盗たちの攻撃はことごとく空振りに終わり、絶好のチャンスをわざわざ提供してくれた。

しかもメリアの剣は距離感を大いに狂わせる。肩を鋭く貫かれた男が、女剣士の武器の仕組みに、今になって気がついた。

「どうなってんだ？ この女の剣は、うっうわああ！」

「シャープエッジからは逃げられませんよ！」

柄の部分に二段階の伸縮機構があり、槍としても機能するのだ。中・近距離の間合いであれば即座に最適な長さに変えて、敵を討つ。シャープエッジは槍の形で、ごろつきの考えなしだった攻めを慎重に、かつ消極的にさせた。

「——遅い！」

今度はこちらから攻め込んでいく。相手に槍の長さを意識させ、隙あらばすかさず突くのは当然。柄を最大の間隔で握れば、手首の返しが大きな遠心力を生じ、剣としての攻撃に急な加速を与える。

ズッバアァン！

振り下ろしに勢いがありすぎて、メリアの身体は一度、宙で前転した。

「諦めなさい、その程度では私と勝負にすらなりません！」

乳房の重量をもつとも自覚させられるモーシヨンで、視界が反転しようとも、間違えることなく足を真下に接地し、攻勢を維持してしまう。シャープエッジは第一に敵の武器を弾いて、第二に軽傷を与え、それでも退かない者には止めを刺した。

「なんだァ？ 俺のチンポに見とれやがって。へっへっへ！」

「違う！ 私がそのような、く……下品なことを」

背後の連中に魅惑のお尻を差し出すポーズのまま、顔を背けてからも、横目でちらりと気にしてしまう。初めて目の当たりにするペニスに、さすがに恐怖を禁じえない。

その間も尻谷を指で上になぞられ、灼けた吐息を鼻先に散らす。

「んあつあ？ ああ、また……どこを、はあ、悪趣味な」

牝の息遣いに誘われ、男根がびくんとしたうった。

「犯られる前から感じてる teme だって悪趣味だぜ？ マゾってヤツか」

「誰も感じてなど——ひああふ!？」

視界の下へと隠れた肉杭が、意外な方向から接近してくる。柔らかな双乳の隙間に、自分とは体温を別にする、熱くて硬い生き物が頭を埋めたのだ。

ずっずず、ずず、ずずずず！

悶え汗がそれを上にスライドさせていく。誘惑に満ちた巨乳の谷間を、肉太のペニスは見事にくぐり抜け、醜い亀頭を鎖骨の中央まで到達させた。鈴口が一発、透明のエキスを女騎士の横顔に飛ばす。

「きゃふ？ はあつ、汚い！ ……よ、よくもこんな真似を」

「なんのためのパイオツだァ？ ハア、いい締めつけじゃねえか！」



筒状に拡張する不思議な感覚が、乳谷に割り込んで外れてくれない。知りたくもない肉棒の、骨じみた芯の硬さと、微妙に伸縮する包皮の性質を感じさせられる。

「さあって、楽しんでくれないだろ？」

「……？ なんのことです、はあ、うぐ、こんなもの……」

固められていた両腕が自由になった。急いでメリアは、腐肉との接触を絶つべく、双乳同士を剥がしにかかる。しかし、ただでさえサイズが大きいうえ、香汗にまみれては掴むのが難しい。できるだけグローブの平手を押し当てる。

すると谷間が圧力を増しつつ、肉根の側面と上下に擦れた。大男が胴をぶるつかせ、振動にメリアの巨乳も巻き込む。

「ハアッ！ そうそう、できんじゃねえか。もつと俺に心も尽くせ？」

「くふうつ、くさい……んふううッ！」

カウパー腺液の腐臭が、鼻の奥をツンと突き上げ、眉間も涙腺も緩んだ。決して弱気によるものではない涙が悔しい。みつともない鼻水まで飛び出し、美唇を汚す。

それでも横顔をやめて、相手をきつく睨みあげる。

「これほどの辱めは、あふ……初めてです、今に見てい、あくう？」

だが、またも不本意な快感が言葉を遮り、邪魔をする。メリアは汗かきな巨乳を、大男の股座に押しつける屈辱の姿勢で、次々と侮辱を投げつけられた。

「おいおい、やめるんじゃないのか？　へっへっへ、自慢のパイオツでもっと俺を喘がせて、ハア、みたくなつたつてかア」

「ケツも極上だぜ。叩いてみるよ、いい音を鳴らしやがる」

丸く張った尻頬を軽く打たれれば、パンツと小気味よい音がする。豊かな弾力が衝撃の余韻を長引かせ、痛みよりも悔しさばかり増大させる。

ほぼ丸ごと露出したヒップが赤く染まるまで、連発の尻叩き。

パンン！　パンツ！　パシンン！

「やつやめなさ、あぐう！　はつく、んあはあ！」

痛み自体はさほどでなくとも、ぶたれるという被虐に、暴行される立場にあることを痛感した。どこの輩とも知れない野盗の集団に、肉体の秘密を暴かれていく。

我慢するほど出口がむず痒い尿意に、わななく太腿が恥汗を流す。適度に湿った柔肌ならではの光沢は、男たちの劣情をますます駆り立てた。

「ひんうふううう……ッ！」

膝立ちの姿勢でも、巨乳を攪拌された分だけ肉体は大いに弾む。ポニーテールでブルーの弧を描いては、力んだお尻で毛先をかきわけ、獣の群れにヒップを提供する。賊の手は無遠慮に、再び柳腰を這い上がっていた。

ピンピンにしこつた乳芽が、左右どちらとも、メリアの指の又にとがり込む。

(はあ……か、カラダが変……熱くって)

引き剥がすつもりで双乳を、今度は滑らせずにしっかりと掴みなおす。飛び出して感じられる乳房の芯を、指で擦れば、快感がひりつく電気になる。一度始まった快楽を止めるのは想像以上に困難で、無理に食い止めようとすれば、苦しくすらあった。

「んあふう、このような、真似を私が……あつやああ！」

あからさまな性的興奮の呼吸に頬を赤らめつつも、疼く乳頭を指二本で器用に挟む。上腕も寄せて、乳果実の揺れ幅を制限し、谷間の圧力を高める。

「だいぶよくなってきたじゃねえの？ ハッ、ハア！」

ふくよかな抱擁に、ペニスが蜜を先走らせた。幹胴の全長を均等に按摩されて、雁首を伸ばし、亀頭に血液を漲らせる。

女性にはない逞しい形状を眺める瞳に、何故か威勢を維持できない。

(太くなっている？ に……においも、すごいし……)

乳谷を上げ下げするごとに、嫌悪感が薄れていく。男根特有の硬さと、必ず捻りを生む絶妙なカーブは、メリア本人にも巨乳の柔らかさを体感させた。

「ひやあつだめ！ も、もうこれ以上、んはあ！」

達してはならないものが、涙ぐむ瞳の奥に見えてくる。あたかも露出目的であしらったかのようなルーンジュエリを、裸体の局所で煌めかせて、柔軟にのけぞる。乳角を中指で

「ひやあつ漏れへる、おっオシッコ！ オシッコおお！」

熱い汁が尿道を駆け抜けていくのを、止められない。原始的な快楽にぞくぞくとし、恥ずかしい液体を駄々漏れに。翡翠色の金属板で密封されているせいで、尿の粘り気を、股全体で残さずに味わう。

「ひはあああああつでれる！ オシッコれてます！」

大腿にも黄ばんだ雫がいくつも伝い落ち、尿臭を濃厚に漂わせる。股間にプレートを当てたままならでの、漏らしの行為は、快楽に背徳感まで上乘せした。

「ひやははは！ 傑作だぜ、騎士サマともある一方が小便だとよ、犯されてな！」

「ち……違う、はあつ私、しっ、したくなん、つくうううう！」

日常の排水の倍は震えて、尿液に股を浸す。肉体の卑猥さを思い知らされながらも、漏出を続け、ポニーテールに腰を悩ましく泳がせる。

「小便しちまうほど気持ちいいのか？ ハアツ、こうか、こうなんだろオ？」

肉栓の捻りはアナルの奥まで行き届いて、粘膜をより多くかき集めた。

「あひやあアツ！ そつそこ、突いちやらめ、んあい！」

渦巻く摩擦の痺れにお尻が過熱し、真っ赤に茹であがる。汗濡れの肌も、性感帯同然に敏感になり、すべての刺激に腰が跳ねてしまう。

「見てるだけでイッチまいそうだよな、ハア！ よがりまくりじゃねえか」

「ああん硬い！ 熱いのっ、おお、押しつけないで！」

両隣の男は、ウエストの括れが気に入ったらしく、そこにペニスをなすりつけた。玉袋を転がし、縮れた性毛で脇腹をくすぐる。

「おらおら、どオした？ 俺様のご奉仕はよオ！」

正面の逸物は一旦下降し、巨乳の弾力を反動に、上へと飛び出す。乳角がばらばらに振れるのを、メリアの両手はすかさず追いかけて、きゅつと摘んだ。

「あはあ！ はあつ、だ、だめ！ オシりに、ちっちんち、はあん！」

自慰よりも激しく乳頭を抜き抜いて、一時の快楽をできるだけ持続させる。止まらない排水を見せびらかすように、脚を大胆に開く。

ぼたぼたと水滴が足元に散った。

(だ……め、私、こんな……よすぎ、たら……)

男に囲まれるというよりも、肉棒が何匹も群がってくるかのような。肩や肘にもペニスらしきモノがぶつかり、ブルーの髪を縦横無尽にかき混ぜられもする。

もう汚いとも臭いとも感覚できない。

「いいの、らめ……なのに、あつ！ あんっそつち！」

嫌悪を抜きに感じる男根は、どれも立派に硬くて、尻穴をしつかり穿り返してくれそう。両手それぞれを双乳の側面に、ぐにりと押し込めば、窮屈な谷間で肉柱の逞しさを満

喫できる。元から締めつけの苛烈な肛門も、心地よいくらいに拡がった。

こちらから腰を返し、パイズリとアナルセックスを同時進行。

「こつちも、オシリも！ あはあついい！ きへる、いいのきてる！」

鍛え抜いた筋力を駆使して、不安定な膝立ちにもかかわらず、体重の傾きを前と後ろに入れ替える。肉太を乳谷で扱き降ろしたら、アナルのパキュームを最大にし、背後の男を牽引する。回数を数えるごとに牝痺れが強くなり、脳がとろとろに溶けていく。

「そんなに気持ちいいか、チンポがよオ！ ギャハハ！」

「気持ちいいの、チンポお！ チンポもつとお！」

オウム返しに卑語を口にし、得るのが簡単すぎる肉悦にメリアは夢中だ。騎士の名に相応しくないアへ顔を野盗に晒して、得意に腰を振りまくり、マゾな肛門を泡立てる。

ぶちゅぶちゅ！ ずちゃつ！ ずちゅずちゃ！

「あつはああんつ、もつる奥う、オシリのおつ、おくつんふああ！」

女蜜が溢れ続けて、排水自体は止まったのかどうか、わからない。今はペニスと戯れる以外のことを考えたくもない。

臨界を直感し、腰のペイスが跳ね上がった。

「い——イクつ！ オシリつ、オシリチンポ！ イクつ、いっイクイク！」

節操のない尻穴で好物を食い締め、巨乳をきつく中央に寄せる。複数の肉棒が交差する

狭い中でも、上手に腰を波打たせ、ポニーテールを振りまわす。

「あんっああん！ あんっああん、んああんッ！」

牝犬の鳴き声も板について、喘ぐのが当たり前だ。ビートを奏でる鼓動が、性感帯に血液を循環させ、肌も穴も熱化する。口蓋が乾くまで唇を開けて、溜まった唾液を舌でかき出し、淫猥に頬笑む。

拒んでいたものと、望んでいたものが逆転し、まだまだ快感を貪っていたい。

「ひあっふ、イク！ もおイクっ、ひっいきたふないけど、いいイク！」

尻穴で足りない分は、乳谷で男性を感じ、自身の淫らさに酔う。

「チンポしてっもつと、はあん！ チンポいっ、いいのお！」

肉太を根元まで呑み込むアナルが、メリアの体内に灼熱を噴き上げた。最高潮の痺れが全身を駆け巡り、快楽電流をショートさせる。

「いっイク！ イクイクッ、イク！ いいいいっ！」

朦朧とする頭の中に、真っ白な快悦がなだれ込んでくる。悶える肉便器は、巨乳を抱え上げつつ、弓なりにのけぞり、甲高い声でいなないた。

「オシリひつれる、もおいつて、いあっあ！ ああああああああああああああ！」

肛門が狭苦しく収斂し、肉の栓をしゃぶり抜く。快感の閃きが連鎖して、ぞくぞくと腰を打ち震わせ、放心の女騎士を、甘美なエクスタシーへと投げ込む。

とりわけ後ろの穴は蕩けるみたいに心地よい。

「くっ締まる！ ケツマ○コにぶちまけるぜっ、らあ！」

数秒の差で男たちも決壊を始め、汚れた精を噴き散らかした。砲身の先端から無数に千切れ飛ぶ、白濁の雨あられだ。

ぶりゅぶりゅつびゅびゅつ！ びゆるびゆるびゆるびゆる！

腸内で何かが産み落とされる。もしかしたら自分の排泄物かもしれない灼熱が、粘膜に染み渡り、出口をもっこりと膨らませる。

瞳をとろんとさせて、肛門快美に耽溺するアナルのマゾヒスト。

「おしりれちやううううううううう——ッ！」

男根の猛々しい拍動を、穴で数えつつ、乳谷から噴く腐粘液も肌を受けまくる。

どびゅびゅつ！ びゅくん！ びくびくびく！

濁った卵白のような汁が、柔肌に競って飛びかかった。強烈な青臭さが充滿して、嗅覚もろとも平衡感覚を狂わせる。スペルマのジェルは豊満な肉体を枝分かれに流れ、曲線の多さを目に明らかにした。

巨乳は生臭いミルクにまみれて。汗みずくだったお尻にも、不浄で野蛮な陵辱汁を浴びせられる。尿で滑りのよい太腿に絡まり、膝つく両脚を別々に這いずり落ちる。

「あはあああああ………！」

自身が果てるだけでなく、大勢を果てさせた優越感もあった。汚れた乳果を誇らしく揺らし、悦に浸る。余韻の波にさらわれ、腰がどこまでも浮く感覚だ。

……プシャアアアアアアア!

力の入らなくなつた尿口から、膀胱に残っていた恥辱の液を、再び洪水に。

メリア本人の熱い黄金汁は、プレートの上の逆三角形から瞬く間に溢れ、太腿の白濁をより淫靡に照り返らせた。

宙を舞うポニーテールが、生臭い牡汁の重みに引きずられて落下する。

「んふうう……はっ、はあ! はあ、はあ……っはあ!」

双乳を急降下させ、ペニスへの頬擦りを最後に、メリアの姿勢がかくんと崩れる。肛門はみちみちと軋んで、幹太りの男根をひり出してからも、完全には閉じなかつた。

注ぎ込まれたスペルマが、ありありと黄ばんで湧き出てくる。

「すげえイキっぷりだつたなア。へへ、ケツマ○コはそんなによかつたか?」

豊乳をクツションに突つ伏しても、淫ら腰を止められない。肉悦の旨味に酩酊し、次があればと、ねだつてしまう。王国女騎士のアナルデビュー。

「はい……けつま○こお、よかつたれす……とつれも」

艶笑を深め、悦びの涙で双眸を潤す。のたくる舌は飽くことなく唇を舐めた。

「ケツでこれだぜ? 前の穴だとおかしくなっちゃうんじゃねえの!」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>